

篠路福移湿原再生に関する取り組み

カラカネイトトンボを守る会 綿路昌史

この度は誠に榮譽ある賞をいただき、会員一同、心から感謝申し上げます。6月16日の総会・表彰式に出席させていただき、受賞者の方々のご講演を大変興味深くお聞きすることができ、貴学会が水環境における水質調査や改善方法について、国内はもちろん世界で大変貢献なさっていることに大きく敬意をあらわします。このような権威ある素晴らしい貴学会から表彰を受けることは誠に名誉あることと感動しております。

当会は地元の小さな水辺の自然を残し、保全しようと活動を続けております。活動の大きな柱は自分たちで名付けた「篠路福移湿原」の保全です。この湿原はかつては日本一の長さを誇っていた石狩川が育んだ日本一広大な石狩湿原の一部なのです。石狩湿原は分厚い泥炭層の土壌の上にミズゴケ群落が発達した大変美しい湿原でした。しかし、現在はその99%以上が農耕地として土地改良されたり、住宅地などに埋め立てられ消失してしまいました。そして、わずかに残ったのが篠路福移湿原なのです。開拓当時は泥炭が掘り出され、札幌の都市化が進むと札幌市民のゴミや産業廃棄物で埋め立てられ、さらに、原野商法で切り売りされ、2001年から産業廃棄物や残土を引き取り、自分の土地でもないのに不正に埋め立てている業者によって、湿原としての命を奪われようとしています。1997年の時点で20ha以上あった湿原は今や湿潤部は5ha、その周辺の湿地状態の部分を含めても10haを切ってしまいました。私たちは石狩川やこの地域の気候風土によって育まれてきた湿原を守るため、埋め立て業者に対してはもちろん行政に対しても色々交渉してきましたが、一向に埒があかず、2004年からNPO法人としてナショナルトラスト運動を開始しました。はじめは資金不足で、なかなか購入できなかったのですが、現在は8,732m²を管理し、さらに、今年6月14日に前述の業者を告訴し法的にも湿原を破壊者から守るよう活動しています。

この活動を推進していくためには地域住民にこの湿原の存在、そして、その価値をわかっていただかなければなりません。そのために、7月上旬にカラカネイトトンボを中心とした湿原の観察会を開催しています(写真1)。カラカネイトトンボは体長がわずか2cm程しかなく、か細いトンボですが、本会の象徴としている昆虫です(写真2)。学名が *Nehalennia speciosa* で「ネハレニア」は女神の名前です。湿原を守る女神として、本会の名前にしました。参加者は湿原の破壊の実態に怒りを抱きながらも、湿原部では、ノハナショウブの美しい紫色の花や、カラカネイトトンボが想像以上に小さくてかわいらしいことに感動して、この小さな命たちが育んでいけるこの湿原を守らなければならないことを実感してくれます。

さらに、カラカネイトトンボの生息状況や水質の現状などこの湿原の健康状態を常に把握しておく必要があります。これを担当しているのが本会ジュニア会員である札幌拓北高等学校理科研究部と大学生チームです。カラカネイトトンボの生息個体数や分布、水質や水位、植生などを調べ、年度末の会報に調査結果を掲載して、次年度の保全計画や観察ルートを検討に活かしています。

さらに、このナショナルトラスト運動を進めていくためには、地域住民を巻き込んだ活動へと発展させていかなければなりません。そこで、湿原以外の身近な水辺を活用して、水辺の自然と触れあい体験、ビオトープ造りなどの自然保護ボランティア活動を行っています。まず、町内の公園内にある雨水調節池「トンネウス沼」では、5月に沼の周りを自然を見ながらの自然観察ウォーク、8月には小学生を対象とした昆虫観察教室を開催、9月には土砂が溜まって陸化してきた部分の浚渫作業やヘイケボタルの放流場所の整備などを行っています。さらに、カワセミがこの水辺を餌場としていることから、人工営巣場所を設置し、カワセミが生息できるビオトープ造りも行っています。



写真1 湿原観察会の様子



写真2 カラカネイトトンボの交尾

茨戸川の河畔では篠路福移湿原のビオトープ「とんぼの学校」を造成しており、6月と8月に整備活動とカヌー体験、親睦会を行っています（写真3）。この場所にもカワセミの人工営巣場所を整備し、5年目を迎え、毎年、8羽ほどが巣立っていきます。

当別川と石狩川の合流部で行われている自然再生事業をトンボやゲンゴロウのモニタリングを行い、再生過程を調査しながら工事方法について提案も行っています。このモニタリングについてはジュニア会員札幌旭丘高校生物部が中心になって行っています。

このほかにも JR 札幌駅やあいの里教育大駅、地下鉄麻生駅で湿原の自然や当会の活動紹介のポスター展示会を開催するなどの啓蒙活動を行っています。

このような盛りだくさんの活動の陰には、広い世代、職業、学校、町内会、行政が関わっているのが大きな特徴です。世代は小学校低学年から70歳後半、公園管理者や建設関係者、衣料関係企業、札幌市や河川事務所など本当に色々な立場から当会の活動を支えて下さっています。活動に関わって下さる皆さんの、「美しい水辺

の自然環境を守っていききたい」というたった一つの夢で活動の環が繋がっています。そして、何より、当会の宝はこれからの社会を担っていく若者が私たちのもとで育てていることです。当会のジュニア会員である札幌拓北高校理科研究部は、1999年には日本学生科学賞の環境大臣賞、2004年には日本ストックホルム青少年水大賞を受賞し、日本代表としてアムステルダム、ストックホルムで開かれた国際大会に出場しています。さらに、高校を卒業した大学生も、メキシコ、イスタンブール、ブルネイ、韓国などで日本代表として当会での活動報告をしております。このように、当会は地域の自然環境を保全していくボランティアの若手後継者の育成にも力を入れています。最近では高校時代に湿原の生き物たちをモニタリングした大学生らが会の運営に大きく関わってくれています。私たちはこの宝物を育てながら、身近な水環境を保全し、水辺で楽しむそして水辺の自然と共に生きる文化を地元あいの里から世界中に発信していきます。今後とも当会にご支援ご鞭撻をお願い申し上げます。



写真3 ビオトープ茨戸川とんぼの学校の整備